

本との
出会いは
一期一会

教員から 学生へ 推薦図書

学生みなさんに読んでほしい一冊を、大学の蔵書の中から紹介していただきました。学生時代に出会った本や、息抜きに読める本などさまざま。ぜひ図書館で探してみたいかでしょうか。

RECOMMEND BOOKS FROM TEACHERS



★ 憲法から考える 実名犯罪報道

飯島滋明 著
(現代人文社 2013)
名図開架 070.15:127

名古屋校舎
長峯 信彦
法学部

ある日突然、君が身に覚えのないことで逮捕されたとする。たとえば痴漢事件。自称“被害者”が悪質にも虚偽の証言をして無実の男性を陥れた。警察による誤認逮捕がなされ、それが実名で報道されてしまった。君ならどうする？編者の飯島氏は、実際にこの冤罪(えんざい)を体験した一人だ。飯島氏の無実が確定したが、冤罪による被害は想像以上。しかも警察による誤認逮捕は後を絶たない。ならば報道する際、警察発表を鵜呑みにせず、実名報道自体をまずは止めるべきではないか。そんな問題意識に立った研究者らによって執筆されたこの本は、具体例が多く、学生にも大変読みやすい内容だ。

日本では「逮捕された者=悪者」と決めつける風潮がきわめて強い。しかし犯人視する報道自体、外国では少ない。しかもスウェーデンでは匿名報道が原則(P.168)、スイスもそれに近い(P.188)。日本が人権後進国と言われるゆえんだ。



★ 史記を語る

宮崎市定 著
(岩波文庫 1996)
名図文庫 222.01:MI88 豊図文庫 222.01:MI88

名古屋校舎
森 久男
経済学部

前漢の司馬遷が書き残した『史記』は、夏・殷・周・秦・漢と続く中国古代史を最初に体系的に綴った歴史書で、本紀(王朝興亡史)・表(年表)・書(制度沿革)・世家(封建諸侯史)・列伝(一般人の伝記)という構成で、歴史を多角的に考察している。東洋史研究の碩学宮崎市定は60年ほど『史記』を読み込み、多数の論文を執筆してのち、一般人向けに『史記を読む』を出版した。『史記』の全文は浩瀚で難解であるが、時間と空間を縦横無尽に駆け巡る宮崎の筆にしたがえば、あたかも中国古代の人物群像が眼前に広がっているかのごとき錯覚を感じる。後学の徒にとっては、歴史をこれほど自由に解釈してよいのかという感動を感じる一冊である。



★ 生物と無生物のあいだ

福岡伸一 著
(講談社現代新書 2007)
名図開架 460:F82 豊図書庫 460.4:F82

名古屋校舎
太田 幸治
経営学部

この本のテーマは、「生命」とは何か。生まれるでも、死ぬでもない。命が生まれてから死ぬまでというまさに「生命」には、どういう仕組みが動き続けているのか。「生物」は機械的なものではなく、時間の中で生き続けようとする「命」なのだということが良く分かる。また「命」はタフであり、かつ、またちょっとしたことで取り返しのつかないことにもなるナイーブなものであることも分かる。読み出すと続きが気になって止められない。例えば、「内部の内部は外部である」という章がある。内側の内側が外側？気になるだろう。是非、この本を読んでこの意味を分かって欲しい。「命」は外側も巻き込みながら生き続けるのである。



★ 和菓子のアン

坂木司 著
(光文社文庫 2012)
名図開架 913.6:531

名古屋校舎
木島 史雄
現代中国学部

私の専門である「古典学」は、古い書物を読むことをもって、そう呼ばれるのではない。視覚や味覚などの感覚器だけでなく、先行する文学や芸術との関係の中で様々なことを捉えようとする思考スタイルのことである。したがって対象は古い文学に限るわけではない。桜を見て「みよしのの」と思い、鶯の声を聞いて後徳大寺を思う。相方の顔次第で酒の味も変わるのは周知のこと。確かに桜そのものも美しいが、感覚に衣装を纏わせることで、複雑な情趣の表現と読みとりが可能になる。人間の心理はとも命題形式で表現しきれものではあるまい。季節や名前など、様々な関係の中で食べれば、和菓子の味はいやまざるやもしれぬ。そんな話がこの本には載っている。



★ 本当の戦争の話をしよう

伊勢崎賢治 著
(朝日出版社 2015)
名図開架 319.8:169

名古屋校舎
塩山 正純
国際コミュニケーション学部

著者の伊勢崎賢治氏は東ティモール、シエラレオネ、アフガニスタンなどの途上国や紛争地域での問題解決に携ってきた人物で、本書は、氏が高校生を相手に講義・討論した記録です。冒頭「経験とは、そもそも、その個人の主観というプリズムで見たスナップショットの連続、それをまた同じ主観のなかで編集したものでしかない。報道だって同じ」と言い、権威、定説を鵜呑みにせず自分で考えることの大切さを説いています。「日本は平和ですか?」「もしもビンラディンが新宿歌舞伎町で殺害されたとしたら?」「9条が変わって得する人、損する人は誰?」など、様々な価値観、信条、文化、民族、道徳、正義、利害…が複雑に絡み合い一朝一夕には解決しない問題の数々を、高校生とともに考えていきます。皆さんもいまは大学で平和に勉学に励んでいますが、社会に出ると、理不尽なこと、穢いこと、信じ難いことが山盛りです。本書は、決してテストのような美しい「正解」のない問題に、自分の頭で考え、対処していくトレーニングになる一冊だと思います。



★ 伝わるデザインの基本 よい資料を作るための レイアウトのルール 増補改訂版

高橋拓磨・片山なつ 著
(技術評論社 2016)
名図開架 021.4:Ta33 法院開架 021.4:Ta33

車道校舎
伊藤 博文
法科大学院

見栄えの良い文書を作りたいと思ったことはありませんか? パソコンを使って文書やスライドを作成する機会が多いと思います。ここ数年でWordやPowerPointといった文書作成ソフトウェアの表現技術が高まり、かつては編集者やデザイナーしか使わなかった表現技術が、今私たちでも自在に使えるようになってきました。文書をきれいに見せるには、そのソフトウェアのデザインやレイアウト機能を上手に使うことです。そうしたテクニックがこの本には説明されています。テクニックの適用前と適用後が対比され、とても解りやすく説明されています。一度目を通して見るだけでも価値はありますよ。文書の勝負はもちろん中身ですが、やはり見た目も大きいですからね。



★ 歴史の破壊 未来の略奪— キリスト教ヨーロッパの地球支配

ジャック・アタリ 著 斎藤広信 訳
(朝日新聞社 1994)
豊図開架 230.4:A95

豊橋校舎
高橋 貴
地域政策学部

本書は、コロンブスのアメリカ大陸発見500年祭に合わせて執筆された。15世紀末ヨーロッパの出来事が活写されており、実におもしろい。それは「序」に端的に表れている。「あるときヨーロッパは自分を取り囲む者たちを追い払って世界征服に乗り出し、手当たり次第に民衆を虐殺し、彼らの富を横領し、彼らからその名前、過去、歴史を盗み取る。1492年がそのときである。この年、三隻のカラヴェル船が偶然ひとつの大陸を発見する。ヨーロッパ最後のイスラム王国が崩壊する」。同年の世界史的な出来事はさらに続く。ユダヤ人のスペインからの追放、ボルジア家からの教皇選出、ロレンツォ・イル・マニフィコ之死、ブルゴーニュ公国の消滅、最初の地球儀の制作、カスティリア語の文法書の出版など。パラパラに見えた出来事がひとつの大きなうねりになって近代に流れていく…。



★ 氷

アンナ・カヴァン 著 山田和子 訳
(ちくま文庫 2015)
豊図開架 933:Ka89

豊橋校舎
安 智史
短期大学部

私が企画監修を務め、2016年10~12月に前橋文学館で開催された、萩原朔太郎生誕130年特別企画展「パノラマ・ジオラマ・グロテスク 江戸川乱歩と萩原朔太郎」は、両者の親交を様々な角度から掘り下げた展示会として好評でしたが、その出発点が、乱歩より8歳年長の朔太郎の詩篇「殺人事件」です(初出1914年、詩集『月に吠える』1917年刊所収)。水晶都市で、青い血の女の殺人事件を追う、玻璃(硝子)の衣装を着た探偵の物語ですが、これは20世紀に普遍性をもつ幻想風景なのか、ザミヤチンのディストピアSFの古典『われら』やパラードの破滅SF『結晶世界』の先駆ともいえるものです。ここでは、いわばその極北としてアンナ・カヴァン『氷』を、お勧めしておきたいと思えます。